橋姫社 宇治橋の西 橋を守神也 祭神一座 宇治比賣命といふ 古記曰橋姫の社古八所 皇神なり式外

宇治橋 宇治より向ふに渡る所の川は五十鈴川也 普通の橋より広からずして長さ六十間広さ二間余中の三の間 前後に鳥居あり 柱の太さ末口三尺余高さ二丈八尺五寸冠木長さ三丈あまり俗にいふ鳥居なり 常彰神宮曰しく

〈此橋は昔より十余町下流の中村曽祢河原に在て板橋の栄なりしと

永享三年普廣院義教公御参宮の時今の如く大橋を架らるゝ

より 其曽祢河原より今の中村森の南に其跡に松二株あり是を宇治橋及び橋姫社の旧跡なりといふ○去俗の云十四の余名あり其川底より丈尺の壺を掘り出しけるに其中に鏡の入形ありしとぞ○楼子に昔種の人像あり 延喜式にみへたり

五十鈴川 御裳濯川とも云又宇治川ともいふ 此川二流にして一流は志な郷村の辺の谷々より集る一流は宇治山々の谷又志摩より流るゝ末は中村楠部鹿海村を経て二見の海に至る 今南より流るゝを本とし川原より流るゝを五十鈴川なりとし六瀬なりとす○イスズとは義は未詳五十の鈴と称すれば是は爾れなり

鏡石 水より二尺あり 御裳濯川の高サ弐丈横五丈斗の大石なり谷川の方より西面をのぞけば清浄明白誠に磨ける鏡の如し故に山鏡と云鏡石の社彰川社並て二社あり 里説には此社の内之今見社出す鏡石の近くに祭る上館谷より又和より出る蜘蛛石の鏡石なり別に谷川は落て雲谷の水流るゝ事ときに老人の語りき○みもすそ川の川上は大石巌そびへ其中を流落る

川なれバ甚絶景之。アハビ石。三ツ石。ゴバン石。ゑるライ岩。蛇臺松。名る山川辺にあり穢石も其中の奇石之然中碁盤岩ハ至つく奇之大石の上平らにて石面自然に碁盤の罫あり

附云　又十鈴川の川上に神足石と号し掘あり往昔洛の今人六十明海の汐る名なり是を観して荒木田氏の長官雅翁なども爰に略す

二寸計　大小さまぐあり
いづれも碁石なり
長サ八分ばかり

四寸計

伊勢參宮名所圖會卷之四終

鏡石

宇治橋より十八丁斗

其間名石多し水又

又妙し

図をうつくみして一毛も
残さず其外奇怪遠近
に至り數の解集に異
なりし渓くの清泉は緑
深く参岩として飛瀑
を去其八自ら松柏う
孫生下く携渓の幽邃も
いふは薛蘿同にみて
姑射の山へ入るが
ごとし

此山の路をうう猿が
淵総淵西紀廣旗に
あぐれ名あり又宇治
橋より門端五六町
のぼりて右の山際に

いづれは龍が嶽
切原が嶽などと
越て志摩の
村邑あり
此辺御贄の
漁人あり
新川社
猿石社
猿石

宇治橋

五十鈴川 御裳濯川 ともいふ

君が代の久し
かるべし
わたらひや
五十鈴の
川の
流れ絶せで

前中納言
匡房

きみが代ハ
尽きじとぞ
おもふ神風や
御裳濯川の
すまんかぎりハ
民部卿経俊

蓮光院
不動堂
法楽舎
大水社
津長社

林崎文庫

書籍諸家の寄附
若干を納む傍に石碑
あり孝経一部を鐫む
東武源鱗の書之石ハ
赤石にて奥州の石とも
先年これを建り

鼓ヶ岳
文庫
大水社
不動堂
法楽舎

称し七寺号を称せしが元は山田西川原所にありて天正年中爰に移す此の寺院と違ひ仏堂殿廊の数多く禅家なれども本寺何流といふ事もなく世に伝奏を経て紫衣を免して宮家の息女代々住職し給ふ開山の大功多誉に不退円悟也 庫裏宸宮殿廣志にして上段は狩野永徳二十四孝の画あり 弁才天社 寺の南にあり

園田 中乃きれの花の方に橋あり彩橋といふ 橋のなるこの町を川原町といふ ○那自売社 園田の花りの方にありて園田山神といふ祭神二座 大水上御祖命 御玉御裳須蘇比女命 並和ぶる

西谷神照寺 宇治山東の山際にあり 建久の頃円位上人隠寓居ありし所也 又西谷自然鉈造りといふ像あり 西谷の扁額は廣沢の書也 今は文人詩歌集会の席となる 今の宮殿烏丸大納言光廣公の御寄附也 とかへり今は比丘尼住持を尚画上に記を

○谷戸松門前にあり 法人会説せしかど今は枯れて西谷の前より

谷の戸に独りぞ松は立てりける我のとも友はなしと思へぞ

○餓鬼谷 真浄院 南隣にあり 此初代文姓といふ僧密法に委しく奇異の事へあり 流と云密山法を此寺に修へしとぞ 蒙光院禅尼帰依し 蒙安年中此寺を建る世に絡る地蔵院

法楽舎 園田山神の右の方にあり 後宇多院勅命として建立し百余年の今に存せり 本尊は三千仏にして真言宗なり 建治三年秀三月異国より龍衣来るの時降伏の

建立ありしといふ今ハ僧法師衆請の付法絶てまれなり

不動堂 日本に明王院といふ真言宗にて本尊不動明王 庫裡客殿ハ天正十六年豊臣秀吉公蒲生飛弾守氏郷に命じ造らしむ上部欄中の善法を移せりといふ不動尊ハ恵心法楽会の古仏なりといへり

津長社 細村の西山の傍にあり延喜式一座 摂長比賣命ともいへ 大水上の兄 ○ **大水社** 津長社の南にあり延喜式一座大山祇御祖命則山の神之右内宮摂社廿四座内

鼓岳 大橋の西よりみえて宮川と十鈴川二つの川に挟まれて一つの堂あり後てつゞみがたけと俗称を

をやしきぞ舞ハではいかゞ通るべきつゞみが岳をおち縁めて　長明

此所ハ世義寺の古跡にして五十鈴川の西より鷲嶺の炭に並びより鷲嶺の炭ハ宮後の南にて御祭ハ宇治山田紀氏の墳なれバ三昧塚といふ本あり 御右の宮川の流し坊ハ九余町川上他八村にありて此より前山へしより因宮人往来せし之故に此鼓岳をも前山ともいへ其法ハ外宮の末へなる更に移して旧ハ神館なりしが乱世より武家押領せしを寛永十六年えの先く神領になるべしとの公命にてうつしへり復せり

鼓岳山蓮甚寺 蓮甚寺村にあるとも云 一条院の御宇永観三位の建立にて真言宗也 今ハ廃してわづかの小堂に観音を安置せり昔ハ伽又西奥にありしとぞ五十鈴川と宮川と左右に流る中に堂ありといへ其堂ありし此寺のあたりなりし流に委しく出て抄して八百年に及べり

新鼓山長明寺 鼓岳と林崎との間にあり 本尊ハ正観音 鴨長明踏く此所に住を

林崎文庫 鼓岳の東の尾崎 大橋西山にあり 貞享二年に造立ありて公より兼金を賜ひ志ある学校合して造立せらる初ハ林崎の南の方丸山といふ所に立らり 元禄三年より此所へうつされ

西行谷
神照寺
西行物語ニ云西行
一名円位後鳥羽
院の御時北面召
されし左兵衛尉
憲清といひて家富
門時の人なり法
出家して西山に住
間もなく大神宮に
詣で詠歌あまた有し
中に二見の浦は霜をむすひといふ
こや二見の浦の月をとりて明る袖よ
波かゝんとは 神路山此桜ハ芳野の山
にも勝りければ尋ぬるの三年斗りつく
東北方へ移さ其後の東山双林寺
の辺に建久九年二月十五日寂をとけて云ひ入る
哉ねがはくは花のしたにて春死なん
そのきさらぎのもち月のころ
人丸社

俗傳云西行の妻にてありし者
爰て此庵にきたりしが一夜の
うちに我像を造て残し
杳然として跡を隠す妻ハ
爰に髪を剃おろして終に
住果て今に尼僧と續く
神照寺といへり像ハ続けり
とりひて後に尼の像と
副て安置を
かくハ傳りつたへれども西行
物語に見えれば妻ハむすめ
ともに高野山天野に尼
となりて往生をとげ
その娘も正治元年八月
同所に傳りあるとぞ
即それ語今のり
述まり

斎宮に立せ給ひしが廬城部武彦といふ人と密通して孕ませ給ひしと阿閉の臣国見といふ者讒奏しければ皇女帝の逆鱗を恐れ御鏡を抱きて此森に縊薨し給ふ帝其の御屍をもとめ腹中を割て見給ふに只氷の如き物あるのみ此に於ひて叡慮の疑ひ解て讒臣を誅伐せらる是全く神鏡の御徳也されば此森は其の古跡なりといふ

月讀森 中村にあり外宮より十八町斗 小名延喜式に云神宮宇治より三里といふ 八町一里とせしなるべし 社は月讀命にして内宮七別宮の一也

伊弉諾伊弉冊尊宮社 月讀の宮地の西にあり内宮七別宮の内にて宇治に此二神は御鎮座 本末は遥拝所也 仁壽二年己巳此所に祭りまして にして天神七代の末人體氣化の神也大八洲国山川草木を生玉而して天下の主たる大日孁貴天照大神を生給ふ又月讀 蛭子 素盞嗚尊をも生給ひし御父母なり

興玉森 月讀の宮の前にあり 猿田彦大神の旧地なり五十鈴の宮地を皇大神宮にゆづりて退き給ふ故神殿はなくして鳥居一基を立て御鎮座より以前の地主の神なれば伊勢国一宮都波岐大明神と崇奉る 両宮共に此ほく八日市の一宮とも称し奉るべきなり

○猿田彦大神は道祖神也鼻の長七咫背の長七尺あまり正に七尋といふべし又口尻明耀眼は八咫鏡の如くかゞやく赩然なり天孫尊天降ましし時道路に立て是を迎

女命其胸乳をあらはに出し裳帯を臍の下に抑垂て咲噱ひて進やと問ふ衢神對曰天孫當に降行ますると聞く故に迎へまつりてお待す先立て啓行んとなり細女又問云汝は何処にか到りまさん皇孫は何処にか到りまさん對曰皇孫は筑紫日向高千穂槵觸の峯に到ますべし吾は伊勢国の狭長田五十鈴川上に到るべしと云云

○按るに大田命は此神の裔なり爰に倭姫命皇孫日神の宮所を求給ふに人皇十一代垂仁天皇の御宇倭姫命に逢まゐりて宮所を五十鈴川上に導き給ふ是皆猿田彦の神徳の今諸社の祭礼の神幸に王の鼻とて渡御あるも此神にして先祖神の導きの表なり

○椿淵 此辺にあり是に付て怪誕の俗説多し然れども真に取るにたらず椿大明神の旅所なるべし

楠部村 旧名楠部山崎の里古市の東の里 これより鵯越へ半里又十町也 ○大土御祖の社 式内不知 祭大国玉命 水佐々良姫命 二座之 是を不知火社と云 清水森 鹿海村か東にあり

○國津御祖社 大土御祖社の内良にあり 宇治比賣命 村田比賣命 二座之両社とも内宮摂社二十四座の内にて村の左の方森の内也 此森を泉水の森とも云は猿之 泉多き鹿海村にあり 森の異あり

御常供田あり毎年又月に大御田祭るの御田植あり 國津御祖とは国の神之内宮の地の神なり宇治姫といふ

○村田とは国の神なり

牛谷 宇治の地の東の坂なり牛谷坂より浦田町へ入る所に門あり此門を桜門と云 昔こゝろよおとろへたまありてうろのといふ

浦田 牛谷の坂より上入の町なり これより入るを宇治といふ ○中之切 浦田の次の町にて宇治の会合之地なり 岡田の二さと其ろのかみ中之切といふ

伊勢上人 中の切右の方にあり 慶光院と号せ 禅家の尼寺之世々上人の位にて伊勢上人と

御供田
國守御祖社
大主御祖社
摘部村

月讀伊弉諾社

弘安百首　　實清朝臣

いさなこれ まことの 鏡 てより より 尓 うしも きよく てらは 月よみ

仝　　九条内大臣

なまはらふ月日 もろ共いざなぎの ことしれさぶみ よはあくらし あし

興玉社は祭る所猿田
彦なりこれ伊勢國の
地主也世俗に伊勢や
日向の物がたりと云事
も此神傳の轉じ
たるなるべし
其義本文にあり
興玉の森
中村

中地藏 古市の次の所なり 此間長峯といふ内宮か外宮まで五十町の其中間廿五町目也 或は中の地藏といふ堂前に長命水といふあり

葛籠石 中地藏所東の方二町斗にあり 此ところも長峯といふ 高さ八尺余横二丈斗 石重りて葛籠の形に似たり今は注連を引て小社とし此傍に観音堂あり又是を大岩の観音といふ 春は櫻多く咲て騒客遊宴の地とす

王孫池 古市より朝熊へのぼるにふせこが坂をのぼりて此所にある俗にわんぞが池又わうぞが池といふ 或は大楠の池なりとも云や昔大なる楠ありしが延宝年中の旱魃に倒る又王孫が池の名は下中村皇女が森へちかき所なりとも云

○赤子池 所伝未詳

月讀伊弉諾両宮旧地 布施戸坂を下りたる左の方 東より森二ケ所あり 仁壽二年八月廿二日洪水に二宮とも流れて今の中村の地に移せり遷宮の年月はさだかならずしも延喜式に載る所は今の地也 上古は五十鈴川此辺へ流れ東北の楠渕鹿海村などの渕へおちて二見浦へ流れてこれより布施戸坂辺まで洪水には水溢れて一面の川なりといふ 楠部川は中古ありし五十鈴川の跡なり

菩提山 神宮寺 真言宗也 下中村にあり 聖武帝勅願によりて天平十六年の草創開基行基菩薩文治元年良仁上人これを中興す 西行家集に菩提山上人のもとに遊びけるよし有るも此上人なり 建久三年正月十九日入寂九十七才

本堂丈六阿弥陀佛（脇基 地） ○両脇立（不動 毘沙門） ○鎮守（雨宝童子や弁才天 天満宮） ○二王門（二王 弘法大師作） 古ハ大伽藍の地にて金堂大師堂多宝塔経蔵などハ弘長年中大火に焼失と其後宝暦十年朝熊岳尊隆阿闍梨これを再建して弟子隆範に附属を ○丈六佛像 続日本紀廿七云称徳天皇天平神護二年秋七月使を遣して丈六佛像を伊勢大神寺に造るとあるハ則此寺也 但し日本紀略にハ太神宮に造とあり ○舎利 是ハ聖武天皇舎利を神宮に納と云 神宮雑記に見へたり今ハ此寺に在 ○萱堂 ○舩板

阿弥陀院 良仁上人退隠の地也文禄元年なる碑に弘法大師象死之傳けり何とぞ院を中興し 門内に六字の名号を刻める石ありたる碑に秘蔵阿闍梨某の筆たりとす 大師入唐前此寺の本尊を彫刻の称号をうけ給ひ帰朝の後舩板に刻して納め給ふ兼和

名号 元年三月十五日空海書之とあり

曼陀羅石 奥の谷にあり 大同二年空海刻之とあ

幅三尺長五尺計

曼陀羅ノ古瓦 甚多し両面に鏤む其内心経を細字に刻したるハ図の如し年月実にめづらし

四寸四方 竪の上下ハ欠破せり

諸佛依般若波羅密多故
是大神咒是大明咒是無
般若波羅密多咒即説咒
諦波羅僧羯諦菩提
訶般若心經一巻
四書寫之御所近邊
承安四年 月六日

承安四年ハ八十代高倉院の御宇にて御所と書したるハ神宮のこと也

皇女森 五十鈴川の下中村にあり式楠部村西の方にあるをも云 日本紀雄略帝第二皇女栲幡皇女

まんだら石
本堂
かや堂
かや堂
かさなり
左りの山上芭蕉塚あり
山でらの
さびしさ
つげよ
ところ掘
はせを

菩提山
神宮寺
坂士佛参詣記云 朝熊巡礼の志ありて
河つゞれる瀧下る程に祠官の軒を
ならべたる館居都とも絶く賑やかに
民廬の垣かこみ家居の風情の
鄙にハ似ず香炉風薫弘正寺
浄場茶竈烟幽に菩提山ノ禅坊
かくれ寺々を一見してと云々 下略
山家集別本 伊勢ふかく菩提山上人月に對して
述懐せしに
めぐりあはで雲井のよそになりぬとも
月になりゆくむつびわするな
西行
方丈

つゞら石

セイガん

せんとせしに安濃津にて病に ○後白河院碑 これハ一代の後鳥羽御悲願の
くまし山田吹上町にて卒す年を 建立なりとと云
○北畠顕家卿碑 此卿ハ奥州國安部野にて戦死を今に讃あり 結城家より
建しとぞ 又西山田吹上にありしハ此百年前のことなり ○結城上野
入道自筆の軍中日記勅制軍法と云書あり 参考太平記にのせらるし光明寺残篇と云るハ此書なり
○鐘 後深草帝の御宇常盤安實氏入道寄附之 毎日酉剋子剋に
撞之 天正年中外宮神宮方より神境の古法なれバ仏鐘出べしと下知を僧等
秀吉公へ訴ふるによつて上部越中守へ給ふ文書今什物とせり 其文に曰

書中遂披見候 山田鐘之儀 外宮禰宜衆より以書状申越候
得先達一向ニ可被申付 無之候 重而自是可申遣候
○如中ござるべくさよあり候 ○下借状を取 下受者也

十月八日 秀吉 朱印

上部越中守殿

寺僧云上古ハ僧の自力又庶人の寄附建立なるといふ事なく何宗門の別ちもなく諸宗兼学し
て定る住職といふ事もなかりしが開基のしれざるもことわりなり
○此茶田の邊りにも七清水といひし数あり
東照山青雲院 妙見町と間の山の南のかたにあり 浄土宗下馬下乗の世々御裏撰寺と

古市

昔の市場ハ今諸國にて
三日市四日市八日市
などいひて其日ときゝを
やく市をたゝせし名の
みのこりて古市ハ近國
より御の商人の集れ
る所なれバ其市と
それ不知花女ありて
旅人の憂を慰め
是浅紅粧るを
瞳に目とし
扨此古市も間の
山の内にて繁栄
なりしおなじく
間の山節と
うたひしもの
なりけり

物あはれなる節
よりうつりて
是と伊勢
音頭と稱
し都鄙
此地の調子

間の山
両宮の間の山
なれば間の山と
いふ昔今も浄
るり節に加へ
語る物に有る也山
とも云書節は元
此和より出る也
故に今とてもさらに残れり
三をせんひくるの跡り
されども遥かに
うせて何を
うたふも弁へがた
し

常明院
本堂天井に吉田兼好の楽書あり
出生死海入涅槃
専念旨趣大楽大
財常能堅固
吉田貞禅山下
野僧一七日参籠
岩屋

稲荷
毘沙門天
金毘羅神
古社
菅原社

隠池 尾部坂より南つゞきのよこにあり俗不動池といふ これいにしへの隠池といへど慥ならず 此池の側に巨石を

安置りて右の方には弘法彫刻の不動あり旱魃の時此不動尊をいれて雨をこへば必ふるといふ

夫木 萍よかくれし池の埋水ちる人へが下りし月ぞうつれる 九條内大臣

尾上山 古名隠園といふ 倭姫命薨去の地なれば之を萬葉集及び代々の撰集に詠歌多し 寛文年中尾上社とて倭姫命社再建なりしが又破却 今は誰建るともなく社なせり さて又隠の園といふは昔より墓地なりしにや寛文の比までは今は山の東まで横さまに入りて神社めぐりに死刑を行ふ事なく若犯罪の者あれば此所にて引出し罵辱しめて追放し或は公人放落せしとて今に此不死地獄谷といひされど是は上古の事にて寛文のころまでは此山のゆゑの池といふ不死刑場なりしが是も又他へうつし其外山田市中に接し数多の寺院或は外宮の境内を侵し住る人家悉く代地を与へて引移させ又地獄谷の名は昔一寺ありて十石を寄附せられし有十石寄などいふとの説もみえ

常明寺 院といふ 高日山法楽 ○この山より小くあり 當寺は第三の大寺之本尊薬師にて天台宗額は後陽成院御宸翰本堂并山門本尊は聖徳太子の建立ともいふ

○楼ろ又此地尾部陵の下より方角にて尾上寺又泉寺又天福寺ともいひしも此寺の古名尾部坂よあるが尾上寺といふ寺あり泉の清泉ありしよりいひ泉寺の名あり其後廃せしを再興して天福寺といひしは天福年中再興の故之今は垣外常明再建せしより常明寺といふとかや

○祢宜落社 常明寺境内にあり 祭神 草野姫命 神祇本源には尾上寺の前にあり

と云祭祀は正月八日十二月八日安度之外宮の末社なり毎年度會神主神楽男共勤之
其式異例之其日長官方ゟ住僧へ鯔二喉を送り又男女陰形の餅を蒔
なり世俗子なき者是を拾ひ男子女子を得るの志ありとて争ひ得り
く住僧本堂に出て誦経あり始終神人は慈對面不及將對面するのこれ
て又神楽あり○岩窟 是を倭姫命の石隠ゝの窟といひく此寺の山門の西のかたにあり又妙見町人家の東表に一つの社地の傍にありまた
とも石隠の地といへり或は妙見町に住院の内の石窟なりともいひ又天巌寺に在り此額こさ
巌上石つきの宮あり此辺餘皇もゝの末社さうだ
る居などを立たるすもみてさぶれつくまゝ宝殿なし○阿弥寺は庫裏の東竹林の内にあり
此辺り地名欲て何ら寺といふ是によりて泉寺といふ名あり
頼政碑 末葉の者の立てりとぞ ○眠地藏 古市の妻女眠の頭をとる ○石題目 日蓮弘法の為に安宮に百日參籠し七字を書きてここに立しなり
筆法依り今の髭題目と云ふ是なり 共に光明寺の藪の邊りにあり
神護山光明寺 光明寺の小菴田といふ所にあり是より川濱へも行きてよし 昔前山といふ所にありて天台宗なり
聖武天皇建立ありしく開基未詳 行基の頃より山田の北上町に移し元文年中に火災あり月波和尚当寺住職の時より禅宗に改む 奥
流と號月波和尚は結城上野介入道忠の子なり ○結城上野入道忠墓 是は小島中納言殿家の宮の属しく奥羽より下り延元三年…

其切開きし所を堀切町山の腰といふ○此地に造る櫛を園女櫛といへる
にて継まて古外宮へ献ずる例あり故実なりとぞ
○按るにいにしへのくしは今よりも男女神代の湯津の爪ぐしといふものの如くし

形ちくのかくし法楽の様形の塗らかへるも是なり大古の形とかへらず

園女の里は外宮の北ちの名にて宮別にありしものゝ名

薫木田 成忠

継橋（つぎはし） 園女にあり一名地蔵橋ともいへり 和名抄に継橋なとありて古名也 古書に佐々良姫命と大国玉命こゝを継で
橋とせしより此名ありといふ地蔵橋といへるは勅使の時叙爵祭主此橋
まで見送る 祭主と地蔵堂訓より記なとあるはそれまことにこの橋のことを河崎橋といふ市中の水辺の号あるもまたなり

外宮一の鳥居より園女町の入口をまを中の島といふ其中途に此継橋あり 西の宮に属し東は園女に属せり○按ずるに此ことしを堀切ざる所は勅使此橋を通行なるべきに非ざれば祭主の橋の名も受がたし

小田橋（をだばし） 是宮と妙見町との境にあり 此川を御贄川といふ流れて川崎船江を経て大湊
清き渚にゐる其間を勢田川といふ 此橋の左りの欄杆のかたに付たる所あり是を俗に忍び橋といふ又勢尾の国俗

河辺里（かはべのさと） 小田橋より三町程下をさして云ふ川辺の里也今の川崎にて此所にはあらず
其の所経らしを仮屋といふよし名付ける

妙見町（めうけんまち） 旧名深が岳 小田橋の東の町也 おの山をといふ 妙見尊林の里也尚下の尾上山の号はあれど

圖倭宮（とうさんのみや） 妙見町左の山上にあり今も妙見堂といふ 妙見菩薩北辰尊星の像を安置せり長八寸ばかり禿髪にして面容童女のごとく左りの二指を垂れ右の頭指をさし信を表ふに似たり素朴作りにして甚古拙なりしとぞ殊に秘することなし

昔は岡倭の宮といふ社地に此 社地は度会氏の胞衣を代々納めし所といふ社地に胞衣を納むるに不浄の事ありけれども上代の放寛なる今も其の人は不祥を忌みて神地をおそるゝ事あり

一説には昔外宮より内宮へ御饌調進の時尾上川にて子等が溺死せしに其霊を求むれども不見利して此妙見の像を得より即ち其の霊に妙見星と敬まり其時より寔に継ぎて小児の疫病の祈をうくる者に験ありしといふ

尾部社（とべのやしろ） 街道より左り妙見堂の東にあり 祭神未詳といへども倭姫の命を祀せり 神祇本源に泉寺の西にあり といふ泉寺絶てなけれども彼泉寺は今の藤寺の一名なりともいふ 即命石隠の地也又小祠なく尾部の社といふ尚尾上山の麓にあるべし

名寄 雑子
我背子らがかれの岡のふるさとばかりにはあはで年のへゆけば 仲正

隠山（うきやま） 此山は山田の町の末妙見町と尾上坂との間の小山なるべし古記に貞観年中妙見星の影を尾上陵より西小田岡倭の宮に居ませるとあれば妙見堂より東なる山あれ尾上

世記云雄略天皇廿三年の春二月倭姫命自尾上山の峯に退まして石隠ませる 故尾上山を隠山といふ 〇万葉 持統天皇伊勢に幸の時之紀部よりて當麻 当麻麿が妻の作る

我せこはいづち行らんおきつもの隠れの山を今日かこゆらん

妙見山永代山ゟ眺望

附 白たまの事

祇宮古記ニ曰貞観二年大内人高至度会氏の女ふ嵩を此国湊の社ふ祈られし年月十一月十五日同胞二人の男子を産む宗雄を雄と号く同三年十一月十八日又同二人を産む春海秋並と号く同四年十一月十五日より又孫りを郷春海とゐふ此六子二家と成あつりけ長尾菅祢と定めりとく今小池の末孫白たまと称されへこれなりといふ

此より白井氏啓蒙（けいもう）
又もりんある所（どころ）と
須磨（すま）の記の多田（ただ）
兵部（ひやうぶ）の浦（うら）も
見えたり

妙見町

宮山
度会氏社
丸山
山末社
錦小川
此辺の惣名度会園といふ

御贄川
小田の橋
つゞらが嶽
八木山
世尊寺
岩が嶽
妙見町

鏑河内 岩が渕といふ宮川の西の道にあり源は鼓が嶽より出る金山よりの落合にて勢田川
小田橋より入る山なるべしみなしきの小川といふ

御田 岩戸山の東なる宮川の御田といふ又は抜穂の御田とも精進田とも云元長
御田あり
の参詣記に 御饌料神田あり其名を天の長田といひて天上の神田を
移すといへり又は御常供殿などいふ豊受大神の御田也当國上に記せし

真谷山 御田の傍椎の木一本を切小屋に造りけるより此に於て十貫の禰宜勤るなる

山末井 同の東未利来谷にあり 外宮末社の西にあり 此社の名は俗には根あり松といふ

麻留山 捉ぐ森の東にありその形 御車に似たれば車塚と云
まろうるなり官子まろ人臣の女なるが欽明天皇の御宇毎月にて代を祭りて初宮にて立し人なりといへり
御垣の内に二種あり舟と後の石窟は初宮子の墓その前の社にて小祠なり宮子を祭りし所なり

○田上大水社 外宮末社の一 田上の社度會氏門の祖大神の小事命 大水社は其の女宮子を

宮後の氏社 丸山西南二町許 氏神村に有 外宮 度會尼門 祖天村雲命之此社の前に小祠ありて社
延賢神主曰天村雲命よりあつし天日別命ふして伊勢津彦命を退け当國創
ありて度會氏の祖を祭りたるなるべし
業の神といへり ○或云 遠祖天村雲命は上御井社天日別命は此氏社彦國見大若子命乙若子命は大間國生社小事命は田上水上社にて度會の祖神に次第せり

世義寺 教王山宝金剛院神宮寺 世義寺は別号之山伏寺 真言宗諸院十九坊 旧は前山亀の谷といふ
所にありしを永禄六年外宮の西に引移し寛文十年今の地に移せり

名所

開基志らず本尊ハ薬師如来今も例歳九月廿五日より卅日の間如法經𛂦て書寫勤行あり 是ハ古聖武天皇の御願によりて神宮法樂に供へまゐらせし 中興ハ為海といふ僧なりとぞ年月もしれざれど着到簿もなく護摩

○どうび 當寺如法經會修行の日晩王に彼書寫せし經紙を田墓地不くに納む其ハ法供神 輿の如きりのまゝを昇若ひ筆を被ふてあやし葩をちらし此寺僧の云是を恵覚大師に擬り まとらハ音樂散花ハ首の送法なりや此經を書寫ちら於に僧徒衛帛を結せび素袋で急乱 あるハ志かり汲ざる紙用ひて紙を漉ひ藁紙用ゐ嚴重の式に僧徒舞なる儀をとりく其形 藁をむ求む○三釣らしく継合せ尾ハ押切頭にする緒にはけり○どうびの名目古今解せざる 武笛を鼓をなして鉦の音どんびいふより号くといへども信じがたし○此寺榜さまつしとくさ 鑒二ツ堀出せり一ツハ長寛元年一ツハ治承二年とあり寺の什物として今にあり此法會 ふる日本寺に往古より書寫さるゝのなり

瀧浪山 世義寺の北にあり 其麓に橋あり 瀧浪の橋といふ

新名所歌合

瀧浪の山にしまらく床の音に寝覚えさびしき園本のさと　荒木田成言

○白子園 世義寺の門前をいふ 古昔ハ園本と號て園本に属せり 寺院五十ハ字あり 瀧浪の橋の東に八幡山牟文山 永代山虎ケ尾山ありて尾上經が峯より連りて山中傘松といふあり

園本里 西ハ高倉山なり 此町東ハ小田橋 先年御奉行所より岩戸坂を切ひらかしめて外宮一の鳥居より内宮往来の近道となるハ寛永十七年九月のことなり前ハ一の鳥居より小路さして下馬の橋ぎハより岩淵に出て園本北方途に出て

禁中の御神楽又ハ
里神楽のるまどれ
附録よいへり
今これを古々
神楽といふ

高神社〇客神社 摂末社の本に出る客神の名は社によりて未詳なり 此二社東西に並 ○此坂をすりて岡本へ入る坂の下彼岸より宮崎へも出る 此坂をこせ坂とも岩戸坂ともいふ 元亀房某此をひらく凡百七八十年斗前なり

豊宮崎 宮山東の方之東より元川又町南西五へ町の下なり 宮崎とは豊受宮の宮崎との心なり 又此下に祓川 河内とも 祓小河なり 宮崎の大海原とも云 此は山引遶て其間の田畑に細流わき交て經緯よくそなはる故に名付し也 茶の祓が岳山東に神道山 西に鷲嶺霊山ありて文人詩客毒遊

宮崎文庫 是も宮崎にあり 宮崎の神山の林麓に 慶安元年に営建あり 是れ外宮祠官等の学校にて志ありし講習討論の寮也 是は沼田なりしを方廿間を平地として築あげ書庫三間 講堂八 東西八間南北三間あり 南面にして左は瀧浪山 右は舎山茶祢の小山 祓の岳を抱き 後は岡本里坊山に續く 遊息 發起人数七十余人あり これを文庫衆と云ふ 古今奉納の書籍目録悉く檐下に掲ぐ 凡四千部に及べり 蔵衆のとき林道春春秋傳一部寄せられしを始とす ○按るにこの学校出来てより来は 渡会氏の学業よりも静謐の時あり 遂て文苑開け 和漢釈書多く蔵むる事 慶安の比までは和本はさらに抄書 關官方の秘蔵あつくなりたる事も希に 漢本は唐本のまゝにてよく和訓をさとるも又稀 又此國に素性の人と云ふとも其器をえらび講師を立 文庫人数の衆に入 他厚志ある人は講師とも衆ともなさまつり 林道春收春秋傳一部之時題

文庫書記之文あり長文なれバこゝに略す此外同氏春庵紀氏永田善斎鈔亭等の記もあり又外の額ハ三宅君安道慶の筆内の額ハ曼殊院宮御筆にて共に豊宮崎文庫の五字也床の間にある大神宮尊号後陽成院の御宸翰をうつし奉る（先年室鳩巣直清貝原篤信伊藤長胤谷重遠など当学才ある人ハ書籍一覧の為に爰に来て文会して講談ありしとぞ）

附言 大坂神学者桂某此文庫に講説せし時継来の日記を宮川日記といふ神饌の古実名俗の変総雑説なとみへ甚文中の華を擬く此書の後に附録を

屋上桜（文庫落成の砌度會延佳の庭上に一の桜苗を生せしを延佳此よろこびて植ゑて名けて二好文木の桜とも云ふ園に又斗りに繁茂なりしまでこゝに延佳ハ文庫造立の棟梁なれバ天其心を感じたと云ふよりて百年の余を経て移ゑ今ハ蘖を生せり 勢陽雑記）

度會大國玉比賣神社 尾崎にあり 祭神大國玉命倭佐良比賣命二座

外宮摂社十六座の内也 此所を大宮ヶ谷といふ大国の渓なりしん

伊加利社 大国玉比賣社の東にあり 祭神末社の部に記す 儀式帳に名社八所の内とあり

井谷池 梶が森の西にあり井戸又井谷とも云ふ保延安の頃ハ往来の人旅宿ながら日暑を凌ぎし霊水なりしが今ハ埋まれる人希なりしを享保八年に穿浚む此池の中に鏃有よつて石面に扇の字に似たる文字あり此水旧暑中に冷やかにして切ガたらし極宅に帰して温めしとぞ

梶森 井谷の東にあり是を御田口の社の旧地とはいへどもカヂハ河内の東の端にてうつふくも宮崎の中なり 神祇本源に御田口の社ハ井戸の小の辺より西にありといふ里

豊宮崎 御田の地名なり弥の河内ハ滄海原ともいふ西ハ倉山南に鎮ヶ岳山澂波ふさうつごさ流る浅し

其二

外宮御山
豊宮崎
大國玉社
文庫
天神

御田植神事

御田の神事ハ五月廿八日をもつて大物忌の父子良此田におりたち稲種をうゆる其さまを始として神楽役人あつまりて歌舞をなす長髪の輿其外祠官ハ馬に多く田の上のあたりに出る也田長十人ゑぼし染帯たすきをかけ丸山にて歌舞あり

風日祈　此宮に毎年七月四日風日祈の神事ありて天下の吉凶を卜ふ事あり是を祈流しの神事と云尚土貢録の条に出

名寄　これまでハ花を惜しまでよそなりし心を風の宮にまかせつゝ　西行

御饌殿　風の宮の東の方にあり

山田原　外宮御鎮座所とハいへども説々御塩殿の辺に山田原村あり説々多し

千枝松　風宮の東睛谷口の辺なり　昔大宮司千枝といふ人植ゑしと云ハ非也又百枝ともいふ　對し枝多きゆゑなり近比寛保年中暴風に倒されて今ハ其跡なる　されども今に千枝松といふ

千代守る神のしるしと今もなを茂るみえてこの松のこゑさらび　勝宣院大政大臣

君が代に濁りもありしるしとや抹麻にみえる悪穂並の名　度會伸房

高倉山　八丁　岩戸の上にあり　外宮の南にあり　高倉山とも日鷲山ともいふ　古記に高倉山ハ十二ヶ所の岩屋ありしかども今二三ヶ所の岩屋あるのみと云々

○按るに名所名寄に入る高倉山ハ彼中にも丹波にもありて当国ハあらし　丹波の高倉山ハ河守の宮の北に豊受宮を丹波より迎へまつりし故其山の名を移して宮に設けし也　其高倉山の上に岩戸あり傍に業座あり甚古き所也此山の尾に附あれば彼是ありまよう客神たる神社は

岩戸　参宮國本所へ出る　或云ハ天岩戸なり大石の石窟にて人の住居たるやまたハ陵墓の跡なるとも疑へり此説ハ世にひろく信ずる所なり　又ハ天日別命の子孫此國にも多し　又天日別命より嫡流の石室を作りて居りしとも　又ハ世俗の説ハおかしき事と

うふことあり　いつのころよりか天上の岩戸に比せしむる其本説とまうし侍る　近世より十二三ヶ所の石窟ありて神代の祖の廟などとこれありといふ

高天原　岩戸の後の方をいふ是ハ天の岩戸に比しより名付るか　神鏡雑記に當所より高天原と名付る社ありてもとの説あれども　按るに天岩戸高天原などの事ハ大和の國にもありとまでいふべし

高宮岩窟の怪異
傳曰高宮のうしろの山に巨十八の岩窟あり法神
家に聚て仏宮つくりきそるといひ傳へたり元の時
初学のおなどなく燓宮實に怪説されば
今もを人のいふきく覚えて石面のたてかなる名もを
よよのつもなる殺羅に於のふずもあり
に神ふしの里にて穀毎に強と古へて
宴飲の楽頁を踏らし路まれ騎をつら
於く冨貴の神国をたのしほしむ日暮れ
里まで論りうて顔面白き名をとてぞうぞ
術りつ道とかてりて雅日に人々の
出あるべーして行て瑤逍ども州らう名も
見へどとなんうれし縦ひぬき神仙
於獄の化城之劉阮七学の郷よハ
州ともうの来て朋友よなうれ
武陵一日の道よおはかど
又漢家のまの卅六の洞天
あれども

かれハ道士法郷を去て
なを石の岩窟にこもり
ちかく邑屋と思ふなどハ
神變不思議ふしく
うるれなども
連綿として
絶ざことなり

高宮（たかのみや） 大宮の未申のかた山上にあり 祭神二座 伊吹戸主神 豊受大神の荒魂也 外宮第一の別宮なりしかも別宮ハ皆萱葺にして千木鰹木御門御垣あり 昔ハ金銅の荘嚴ありて瑞垣玉垣もありしかど今ハ絶て瑞垣一重也 しかるに内宮にまうし給ふ荒祭宮に副奉りて後ハ荒魂宮とも申奉る 神境雑話に見ゆ ○参詣記云 大宮の乾にあたりて御池をめぐりて高き山あり これを高宮と申 古語なれ 多賀の御前とも申也

下部坂（とりべさか） 高の宮の坂をいふ 神境廣博記云 於檜尾鐵部坂とあり 故に檜尾ともいふ

神祇百首 巖竈も斧の音ともせぬ山に誰か掛りし人の坂ありてよ　元長

高の宮へ参るに御池の東北石橋を渡て風の宮との間を掛り境にして坂道にあり 已に高宮の一揖方拝しける後より坂をのぼるべし 坂まで歩むに口中に唱ふる称文ありその口称へとさえ

八部池とて坂の中程石階なき所あり 是ハ重徳太子御神宝の神境神牙ともを納め鎮め給ふ秘密の所なりといふ

袖摺石（そでずりいし） 袖引石ともいひて人の踏まざる石あり 数ハ二つとも四つともいふ 鶺鴒神石ハ四つといへり 袖引石ハ上段より第一段目にて一段十二西より一ツ有 二ツ目也にも左右より参人の為十七西より二ツ 日山の下麓に小なりしと延喜神名式に見ゆ 又ハ大明神の縁記にあり 或説ニハ大國長髪に和して昇天せしものゝ側

金石 高宮石垣東の側に在り 金石とも石厄拂ともいふ 拜殿ありて神楽を奏す 享保の頃まで在る者なし 其ハ宮中の路上修補せし時此拜殿の後より一ツの奇石を掘得たり 長サ二尺許 幅八九寸 重さ

末社順拝

昔ハ勢刕多気郡度會郡又ハ郷う座る摂社末社を悉く順拝せし拙なれども行程日数を累ねの労をてひく宮中ニて其遥拝所を立らる

御殿造りは南面にして萱葺掘立柱は太古宮殿居などの様にて
家作りを見るへし竹木等其まゝ縄からげにせしならん ○風博鰹木 今農家屋上
ある烏おどしといふもの鰹木に似して千木は竹木の末きを以てしてなるべし 形は雄略天皇の時に堅魚
の國より屋上に鰹木の様より起りて御殿の材ありてを屋に焼き込む事ある古事記日本紀にみえて
此樹なれや其は制禁なるまじし 今も風流に見立てて本々に挿すを美しくかざりとするは庭訓に博
木ならうもみへたり千木とは風木にて千々と風の古語に見えたる大古の形をなせしものにて別に鰹木
倹約を表するなるべしの説もありし ○千木内宮は内人切外宮は外人切りてある其中うきたゝきを入るれ
のごとく別に説あるのみならず

東宝殿 瑞垣の内正殿の前にあり ○西宝殿 西にあり東宝殿には御幣錦綾御調の糸
納め西宝殿には御神馬の調度等納まる御宝殿也

幣帛殿 外幣殿ともいふ正殿の乾の方にあり 東宮皇后の幣帛を始め東海道諸役
所の幣帛および諸國の調などを納む東西宝殿は天子の幣のみ納むなり

裏御門 正殿のうしろの北にある御門 然て御門には何も一り豊石窓神 櫛石
右四紀にまち小の御門を記せり
窓神二神を祭る是を御門神といふ 延喜式 櫛石窓神四面門各一座 豊石窓神四面門各一座とみへたり一名を天石戸別神
とも申て古事紀に見ゆ○私曰諸社の門によって此は矢大臣といへるは二神の像とすべし

御饌殿 正殿の艮方内の玉垣の外にあり 是は二所大神宮へ朝夕の御饌を供する御殿なり 聖武天皇
神亀六年正月十日造立あり是は内宮の御饌をも外宮より持運びゆゑに神亀六年浦田坂
にて穢ありしに随避べきやうなくて持通りて備へしかば帝まより御悩ありて是をトせたまひ
なりふまき神の御祟ありしと奏せしかば勅使をさし立て宣旨ありて御饌殿を

瑞垣御門 蕃垣御門の内なり 瑞垣あるゆゑに此名あり 延喜式儀式帳などに度内院の御門といふ此内御本社なり

度會宮正殿 豊受皇太神 一座

相殿 天彦々火瓊々杵尊 天太玉命 天兒屋根命 二座

続後拾遺
かけまくもかしこき光の宮柱なをそさき心あるらん 俊成

社人に向て此神の義を尋ましても深秘とのみ答ふ因て坂士佛参詣記を見れば外宮祠官長官従三位家行卿の教示に云 相殿は皇孫尊を始先尊 瓊々杵 天兒屋根命 太玉命 三柱ましますを天兒屋根ましますを故に當社と宗廟社稷の神とは申なるによりて年来の不審をひらき侍りぬ皇孫の尊と申は天照太神の御子天忍穂耳尊栲幡千々姫を娶て生せ給ひし御子也素戔嗚尊は伊弉諾伊弉冊の御譲を得て我朝の御あるじとして坐しけるが國土を皇孫尊に譲りて御身は出雲國に御垂跡あり今の大社是也と云々 私曰是によりて坂士佛参来の不審をひらきけるとは是又不審なり

或曰豊受の豊は豊饒ゆたかの義にして俗に豊年といひて萬物の生植霖

其二

勅使進発の前に宣命をうらとして神祇伯禁庭の重幣進日行列を発の日又当つく宸筆の宣命を賜ふ常もまゐる長月の神嘗の御幣ハ海中臣能やて奉送と勅を奉りて逢坂の関を越へ瀬田を不忘の渡し宮川を渡り揃ての調物と幣一の鳥居より下馬行列あるひハ御馬を引立て中臣宣命を申せば皆拍手の揃と玉串御門の脇に立る次に御遷を先にして御石にて其より一禰宜正殿の御鑰を開て御幣神宝を納め奉る勅使ハ本座より進んで宸筆の宣命を讀給へハ禰宜も是を納む是より使退て外宮とてハるの宮ニ直會殿の外にて神酒神供等を載せ饗膳ありて禄を給ふ然るのち宮巡昔ハ女宮一度ニ其式同じ

度會宮 豊受太神宮
西宝殿

神嘗祭 兼 例幣使

天子より両宮へ勅使をたて御幣を奉らせ給ふハ九月十一日十七日にて年毎のわざなれバ是を例幣使といふ此わざ朱雀院の御時より始り十一日葱華よ御してかしこくも神祇官へ行幸ありて行ひ給ひしとぞ外宮ハ長老又毎年九月十一日よまつる

九丈殿

大宮司

官幣使

王使

祭主

玉串内人

其二
祭主ノ座
子良物忌父
長官
五丈殿

石壺（第三御門の左右にあり）東ハ勅使宮司西ハ十員の禰宜の石壺也（一名石疊とハ石を以て疊て神祭の及び紛らぬ為の附標と云への標之標中に云級位の如し又ハ石疊ともいへり但し勅使宣命を讀ときハ新に假の石階をつくり給ふなり）

斎王候殿（玉串御門の前東の方にあり）（正殿東にあれど西にあり）古ハ玉串御門の前東に斎王候殿西に舞姫候殿ありて祭礼にハ斎王玉串を立奉ル舞姫候殿にて舞奏せし也両殿ともに絶てなかりしを元禄年中再興ありて祭礼の時雨天なるには勅使宮司宣命祝詞を此殿にして讀奉り給ふ例なり

玉串御門（第三御門の内にあり）一名内の玉垣御門といふ諸祭に宮司禰宜の輩ここに玉串を捧げ物忌父ありて此御門の柱の下に納るによりて此名有るなり（儀式帳に第二の御門の内に玉串を納むといひ延喜式にハ外の玉垣門に進み入て内の玉垣門に當り跪くとあるハ是なり此門の内にも石疊ありて玉串を納めし由古記にあれど石疊ハ絶てより御門もみだりに遥拝せしを寛文御遷宮の時御再興あり諸國の参宮人ハ此御門の前にて拍手す玉串とハ[illegible]大神宮に捧る串にさをするなれば玉串といふにぞあれどすべての捧物を玉串といふなりとぞ○玉串とハ玉戴とも云○玉串とハ玉戴とも書く玉ハ美称の辞戴串にて今紙をこまかに切て戴て串にはさみたるをいふ説文にハ戴を瑞なりと注して神へ奉るよしとその[illegible]）

新古今
神風や玉くしの葉をとりかざし内外の宮に君をこそいのれ　俊恵法師

是ハ康治大嘗會に中臣壽詞を奏せしに讀し奉之祝詞に玉串大中臣持ちて[illegible]

蕃垣御門　是を猿田の御門といふ玉串御門と瑞垣御門との間にあり儀式帳に蕃垣二重とあり今ハ其一重也擔板の上におし木を丸く彫て猿の頭に似たれば名くといへり

神庫 一の鳥居と二の鳥居との間西の方にあり 古典記録等を納む寛文年中の御遷宮のとき再興を 昔は是に添て文殿とて講習校勘の為建置れしを中頃退転して今の宮司鋑う付てよびらるゝ是を文庫といふ 神宮雑事記天平神護年中の条に文庫焼亡の事を載え

茜の社 茶の町氏神也社なくたてり其後をまつれど 二鳥居茶左りへ入所にあり宮ありて茶に鳥居

二の鳥居 一の鳥居の次にあり 勅使の時此所にて大麻御塩を献じ榊の枝に木綿を結び垂て振ならひて堅塩を土器に盛て榊の葉にのせて振濯て清めまつる 諸国の参宮人に御師の家にて清めの御祓塩をいたゞくも是に習ふ

直会院 五丈殿二宇九丈殿一宇の三殿を一にすべて直会殿といへり又は五丈殿一宇を神司殿といひ九丈殿一宇を一の殿ともいふ是も延元禄年中公より再興し祭りつるとなん 是は勅使饗膳の所也 公卿の根元にはうまうあいと云里なるいとも 神饌をまをす故も神饌のおものといひてまつくをまいふなり日本紀神武天皇の紀には嘗事の字をなほらひと訓し 神嘗祭にも会するとなるいの御さん御酒まいるのあり春日社にも直会殿ありて勅使神食をいたゞき給ふ所なり其後解斎の御ゆへ参る是三院と直会殿にも 今も神嘗祭にも解斎度にも用ひて附よりて其名のちがひあるにやしもおがむ 此一殿に於て給ふて饗膳あるなり御輿宿と云所其西に通が今は絶えり

○玉串所 九丈殿の前大庭にて云 昔は石壺ありし使は此に於て 神宮雑安御遷宮記にも玉串所の石壺とあり 雨天には御輿宿にて行しを今は一の殿にておこなふ是は月次神嘗祭に禰宜宮司

清盛楠

昔小松内大臣重盛公
勅使として参向の折
艫にさはるべしとて
西へさし出る枝を
伐らせられしゆゑ
これを里俗あや
まりて清盛楠と
いふなるべし
勅使として清盛公
三度重盛公八度
参向ありし由ハ
勅使部類記文
等に見えたり

竅ありこれを作る者は秘密の祢宜といふ又る良き鍵へ出器を納むる付出器橋のお家といふ
あれど今は北の御門口より宮中へ入まつり其外ふる紀伊緒あまさ備へり橋は北の御門口の西に
うつしまつりしくわんへく茂社の北側に二又井の石二ツ建て其印とせり

上御井社 御炊屋殿の百廿丈西 茂岡山の麓にあり 此御井は天長井とも天真名井とも忍穂井とも
井とも云 水の上に社ありて其戸を閉て水を汲む 玉鉾天村雲神 大神宮の御供に用
ゆれども一二斗を加ふるのみにて炊洗には忌火屋殿の水を用ゆ 霊水を汲て
ねまゐる日百廿丈の間は無言にして高貴の人に遊ふとも辞讓せざる例なり
是れ昔天村雲命 天村雲命は外宮祠官祖神天牟羅雲命 七世孫一名天二上命とも後小橋命ともいふ 天上より下りし不増
不滅の水を日向高千穂の峯より丹後の真名井原に移し其後此茂
岡山に移し給ひしとなん 藤[illegible]
此奥に池三ツあり御湯の源なるよし 一ツは松盛殿の池 一ツは比丘尼池 一ツは御池といふ

夫木
君か代は濁もあらじなかれやふかきにあかぬ忍穂井の水
度會仲房

風雅集
千とせを歴て汲ともつきじ久かたの天より移す御井の水
度會延誠

茂岡山 御井の社の上の山 俗に御井山といふ（モ井とは水の古語なり 古に水をモヒトとよむも是なり）

神祇百首
花咲けは真名井の水をむすふとて茂岡山にあつまるせそ
度會元長

○荒社 石積之社殿もなく祀る神もしれねど此辺りは荒寂たれば俗称なるべし

国見社旧地 荒社の東にありて式内之昔摂社再建の時こゝへの地を考へ得ずして寛文建らるといへども荒社の石積は此国見の社の旧地なり

御厩 木柴垣の東の西のかたにあり 昔は内外の御厩とて二所ありしなり延喜の代よりは櫪飼御馬二疋と載られ又式には「已不と見え留」ど今は此御厩のみにて即内の御厩なるべし今は木馬を居置る

○祓記道 御厩のうしろにあり 服着及び僧尼法体法体の輩のかよふ道なり

▲是より宮中勅使上使の本道

清盛楠 前に云一の鳥居橋の前なる大楠樹なり 又細図上に記す

一鳥居 御宮の本宮第一の鳥居なり 宮後より纔に出行東にむかふて経行けり 橋詰より一の鳥居までつゞき

是より兵仗及び仏具を帯せざる事小の御門に同じ 勅使上使も是より下乗せられ兵仗を解て参入あるなり 内宮儀式帳に鳥居とはいはず御門としるせり元亨釈書に大門の外有衛門俗曰鶏栖此和名抄にも鶏栖と出て鳥居と訓せり鳥居といふし への門にて神社のしるしとせしなれども神くの山でもいまあり平家物語にも倉の宮の詞をさせたまひしも是明山の鳥居のこと綴なり今又墓所の鳥居などにも鳥居を建る是をはせて門とするの事をあるべし唐文をよむ人鳥華表とあつかりのも泚なり

の御饌なり此より後は八九歩より奉りて門経通ずる所を限として其間宮に出でん但し奏事を経て勅許を蒙る之正員の禰宜は祝詞をよく此二良子と倍仕し抽恐の旨ある御饌をそなへたてまつる若は内宮の神饌も外宮にて調へ宮人そなへたてまつる道路の様子ありし後は二所に外宮の御饌殿にて奉ることとなれり

忌火屋殿（いんやどの）

は子良館の前にあり朝夕の御供の炊さ燧火してこれを調進とす故に忌火屋殿といふ一殿を分ちて西の間を炊屋殿といふ東の間を御贄調屋殿といふ附して神供の餅をつくる所あり是も今の様にはあらじ粉を以てつくるなり拝は用ゐれども用ひず古の風なり○凡神の饌は忌火にして悉く其外の和し二見浦の塩をとり給へ供ど此處にて用ゐるきり火の器は古例図のごとし　今俗に[illegible]日をヨミヤと云は此忌火の[illegible]ならん

燧の図（きりのづ）

枇杷木を用　六角或八角

ろくろのごとく廻せば上の縄まきまとひてきりきりと廻りて火を出すなり

檜木　廣サ二寸斗　長サ三尺斗　厚サ三寸斗

かくのごとくきざみつけて此ところをきりもめば粉あまたなりて其内より火出るところへうつせば火たちまちなりそれを松にうつすとなり

小柴垣（こしばがき）

忌火屋殿の東南宮石の右にあり此御垣に付て朝廷を遥拝せらるとも云又神のまへ禰宜の列を整るところ故列所とも云とぞ

廳舎（ちやうしや）

は子良館の西南にあり禰宜物忌父等此舎に集り諸神事の執行をなして廳は政所とよびて政事を執行屋なり是より下を之を廳宣として神領郡縣祠官職掌人等を下知する所なり

御酒殿（みきのとの）

は子良と廳舎とのあひにあり　御酒を納むる殿也此所に豊宇賀比賣命を祀る

此神は倉稲魂神と同躰にして又は大宜津比賣とも亦保食の神ともいふ也

酒を上代にてはきといへりおほ神酒といふ又黒米にて造りたる悪酒を黒酒きといふ又よき酒を白きといふ上代は今の清酒はなくしてみな濁酒なりさて又酒をみわともいふ萬葉に味酒の三輪とよめり故に三輪は酒の神にせしにや今酒屋の門に杉を標とするも其縁なるべし○大和国に石制の酒といふ物ありて是に付てそれを今世に白酒と名付る物ありて此故にやあらん

万葉集八
味酒の三輪の祝が山てらし秋の紅葉のちらまく惜しも　長屋王

全十九
天地とともに久しきまで萬代につかへまつらん黒酒白酒を　智奴王

御調倉　廳舎の西にあり　是は御政印を納め奉り又は調物を収むる倉也御政印は金印にして朝廷より下し給ふ室にあり大宮司と政神主家に納む大宮司家にみる度斎衡二年内宮は天平五年外宮は貞観五年始て製して残る也と兩神宮奏聞の類状に押之例と云て

御贄倉　御調倉の東にあり調進する御膳の土器其外年中祭りに用ゐる御土器宇治のよりまゐる納むる倉也是を宇爾土器と云

○宇爾は多気郡離宮旧地西にあり　御饌土器皆此所よりまゐる日用の土器は若干其中に天の平瓮などいふものもやうかれ物しくよふ

其三
高倉山（たかくらやま）
高佐山
日鷲の山
加利佐武峯
左貫山
鵜不留山
青岳山
等の名あり
高宮
内宮遥拝
袖引石
外宮
風の宮

茶屋
神楽屋
岩戸
高神社
客神社
岩戸坂
千枝坂

正殿
御饌殿
東宝殿
西宝殿
末社巡り終
石壺
五丈殿
玉串所
九丈殿
二鳥井
四所遥拝

其二
天子の御参宮ハ
持統帝聖武
帝後白川帝
室町殿御参宮ハ
旧記に委し　信長公秀吉公
僧尼拝所
手洗所
御池

外宮宮中之圖
小宮
豊川
館
清盛楠
岩戸坂

御器倉
御調倉
御酒殿
子良館
朝廷遥拝
小鳥井
鳥井
御厩
鳥井

三宝寺 山田の中世古寺より二町西なる不動明王真言宗にて寺号山号来由とへて世古寺といへり 塔頭六坊あり 士佛参宮記に山田三宝院に止宿のよし記せし所なり

離宮院舊跡 宮後にあり 或は太神宮司と号し或は大神宮の御厨と号し神領の年貢調布をおさめ官人是を検領して其々の料に充て置るなり 是は内中外院の厳舎門垣等其数甚多かりしなり ○小俣の離宮院は是を移しけるとぞ

○離宮院に坐 中臣氏社四座 武甕雷命○香取斎主命○天兒屋根命

栲幡千々姫 今称するものは春日明神なり

月讀宮 宮後川の端の東にあり 祭る所月夜見命 荒魂命二坐也 外宮三別宮の内なり

子細内宮月讀の条に弁ず

新古今

さやかなる鷲のたかねの雲井よりかけやはらくる月よみの森 西園寺入道太政大臣

風雅

こゝにしもあとたれてし御かけ[illegible]ぬは今もかしこき月よみの神 後宇多院

高河原社 一名河原神 國生神 月讀宮地の西東の方にあり 外宮攝社十二社の内なり 祭る所月讀の御魂或は御霊神ともいへり

館町 上中下あり 月よみの宮より外宮へ参れば此館町へいづるなり 一志宮後田中 茶屋町并属と云館といへるは昔宮掃国司人の館なりしが今は館町あり 旧[illegible]にて神事の付る神事ある所右の横道にて外宮の入口也 御門の如し 此参宮道は小御門と一の鳥居との二の鳥居あれども一の鳥居より参詣すると本式とす 館町の内入れの辻ありて是山田の真中にして諸方への別径

山田（やまだ）

山田六十三郷の惣名也　和名抄には陽田とありて山田ハ邑　音訓紛られて混じたるにや　明人へ標太くなり

威勝寺

大宮廣

一志

天間社

園生社

美名佐社

清の井庭社

上御井社
宮後
高河原社
月讀宮

落合え此より駒野へ三里鸚鵡石までおよそ八里といへども山路難所に
して去の一日も旅人及び經し船にて往来すれバ其労ハ少なけれ
急流なれバ左もなく絶景つらなりたるハ別して駒が野よりよし
巌巒乾坤中中村の南猿見坂といふ所ハ無双の勝景にして松嶋にも劣らじと
いふ其南に鵜甘阿蘇などいふ村邑数多ありて各々往来繁く山田の
市中へ魚荷の出る事昼夜不絶山中なれども魚鼈に乏しからず又洞
跡あれども聞名之石は山の麓に偃然として其高さ十余丈斗まで甚黒き石にて百尺
もみるべき所なり礎などもなし其岩のほとりに居て言ひ或ハ謡歌鼓吹
の音にも皆ことごとく響をなすが故に此奇石なり年傳播やゝ廣くなりて案京並長
義郷の吹ふよりて詩記多く後の叡覧に入り靈元帝畫師山本宗仙に給せて
屏風に圖せしめ其記を添付なりしと云々　東涯　随筆
○漢名此を響石といふ彼國にもありて何をかべしとぞ
近江浅井郡村にも同石あれども是程はあらざり

土宮橋

俗よとうくしといふ○胜柄
南橋のつでさなり
○昔此橋より楫をさげ楫流しの神事を行ふ風宮にて
行ふ七月八日之風日祈の神事と云○楫の渡て流る
は其由縁の是にこし説ふ今なとハ此年にふ○長楫のり説く多し

おりふしにみなそこしまの長楫なるぞ引むひろきめぐる哉　寂阿

中川原

宮川の東にあり人家列まり此東北なる高向村の内之和名におゐて名ある所と云り
書写の誤ちかし町の西宮川の上より田丸口の渡しあり是を中渡口とも云　磯村上条

村の流しみ流村の流しを誡てある西村より出る此所古の經還かや

○中川原中島昔ハ宮川の川中なり

堤世古

中川原の世古とハ他所にて小路裏町などいふがごとし

附言 川の町也

○神都にて横なる小路を世古といへり又附ての話 下馬の橋といふ西にも又日本第六番の世古といふ古名ありいにしへのころいや此所の者雅風にあらく朝鮮へ漂流されたるが彼地より古今の老母へ後書ありてまた無事なる其ハ表名は日本第六番の世古母へ参らとぜしもと日本にて志れものなりけりよ世古といへり 勢州山田の方言なりとのそきくそつかり達を云れ西川恕見翁が夜話草にみえし 割ヤカタラ文又ハ康熙が弄徒婆の報つらく芸よ孝信の主ぐよ云べし今も此地名を岩淵町のかどとよあり 夜話草

大間國生神社

東ハ大間西ハ國生神社と大間ハ大若子命國生ハ乙若子命を祭る大間廣ハ左の並にあり大若子命ハ一名大幡主命 乙若子命ハ一名加志良居命なと云度會氏禰宜の祖なり 大間廣町の左の並にあり

大間廣

上中之郷の紙下堤世古の入口にして右のかたへよるよこちちなり

草薙社

大間の中しろの西にあり 祭所標劔伏之誡は凶賊ありし附垂仁天皇の御代大若子命に詔して討しめ給ひし劔は日本武尊の故例に擬して後世此社を草薙と称する乳標劔杖ハ標ハしるしの劔杖ハ兵仗にして後世ハ節刀として叛者ある時誅罰せようぬする者をなしまれをよなりしの劔をたまはり向て征伐せしむ此事は禰宜補任記にみへ西標劔伏の事これらハ集にみえたり節刀の事ハ禁秘抄にあり

附言 内宮の神山より掘出せる環頭太刀なる寄石あり彼人て素戔嗚尊の劔の所ならん疑しく存れと昔の環頭の劔なるや不知谷川士清が勾玉考にも義あり三輪山にも掘得たるありとぞ是を宇治山本氏の人の許に得たる環頭劔のこと日本紀古事記等にみへたり

清野井庭社

大間社の東人家の裏にあり祭神草野姫の神にて此の所之外宮摂社十六社の内 俗にこれを小間の社といふ大間に對しての俗称なるべし

中川原
諸国の参詣人を御師より人を出し案内し迎ふ其御師の名講の名組頭の

宮川は山田の入口に在り 一名度會川 豊宮川 斎宮川 禁川とも云 源は和州に起り流れて多気郡瀧原の宮が瀬也 其外谷々より落て二見が湊に至る

異俗の方に 小鰭鯉 西は宮川東は風ふけばよし隣の川にあまさる之

渡し船を豊宮に前にせず満水の時も本宮の神官より人を出し来諸人を渡さし

御遷宮の時は右船幷くる是上古斎宮勅使参向の時の例にしぞむかし斎宮群行勅

使参向の時宴あり饗せしなり又大嘗日禰宜の大祓も実ら勅使を法園より来諸人

此川にて浴しく身を清むるもこれによるなり

新古今 契りありて今ぞ宮川のゆふかづら永き世までもかけて頼まん　定家

新拾遺 御禊する君が宮川の岩浪の数より君が祝いの数ぞかぎりなき　朝勝

○清盛堤 宮川の堤をいふ 其川度々破損し方こに元正天皇霊亀清和貞観の比度々

此時の堤も今は無して宮にて

大風洪水せしより記録に見えり 崇徳院大治三年勅して大宮三座及

大河内神社 志登美神社を河水の守護と祀らせ給ふ 此時平清盛命を

承りて此堤を築く 又弘治三年以来度々洪水せしかば修補あれ 元文六年辛酉七月廿二日洪水数百丈

○御川祭 毎年五月三日是を 鎮座本記に渡相河原に天忍穂海人と云人

年魚をとりて神饌に蓄ふとありて今も其末の揖守氏の人鍬竿

を以て年魚取の式あり 其詞云

宮川東岸（みやがはひがしきし）

豊宮川（とよみやがは）ともいふ

風雅集

君が代のためしとこれも宮川の岸の杦むら色もかはらじ

後京極

土祖神

一鳥居

直會院 玉串所 同リ拝

手水場 中坊

五百枝杉

齋王候殿

度會宮正殿 相殿三座

御饌殿

高宮岩窟怪異

山神社

千枝松

豊宮崎并御田植の神事

伊賀利神社

神楽

神庫

別宮遙拝所

伊弉諾尊伊弉冊尊二尊の遙拝所

三鳥居

玉串御門 蕃垣御門

瑞垣御門

東宝殿

西宝殿

四十末社

内宮遙拝所

下御井社

高倉山

井谷池

禅河内

茜の社

三石

御母神拝所

第二御門 第三御門

神嘗祭 例幣使

幣帛殿

高宮

土宮 月炊殿 地護宮

風宮 炊殿 風日祈 宮中絵

岩戸 高天原

同文庫 屋上桜

掘の森

御田

二鳥居

御池

僧尼拝所

石壺

裏御門

下部坂 被拂石 金石

月讀宮遙拝所 日御炊殿

山田原

高神社

度會大國玉比賣神社

豊宮崎

安谷山

山末
瀧浪山 白子園
河邊里
隠山 隠ノ池
光明寺 結城入道忠墓 小畠顕家碑
経ヶ峯
貝吹山
月讀伴裝諸宮舊地
月讀森
牛谷○浦田
西行谷神照寺 鐵鬼谷 菩津寺
皷ヶ岳
橋姫祠

麻留山 田上大水社
岡本里
妙見町隠ヶ岳
尾上山 後白河院碑 穢の子
間の山
中地蔵
菩提山大神宮寺 安陀羅石 古瓦
伴裝諸宮社 伴裝冊
中之切
法樂舎
蓮臺寺
宇治橋

宮湾氏社
継橋
岡崎宮
常明寺
古市
葛籠石
與玉森 様ヶ渕
慶光院 伴勢上人
不動堂
長明寺
五十鈴川 御裳濯川

世義寺 茶 そうび
小田橋
尾部社
青雲院 神宮舊社 倭姫岩窟 阿加井 眠地藏石 和泉 同
大五輪
王孫池
皇女森
楠部村 大土御祖社 國津御祖社
岡田 那自賣祠
津長社 大水祠
林崎文庫
鏡石

伊勢參宮名所圖會巻之四

目録

伊勢參宮名所圖會　四